

ミステリ読書案内

2023. 6. 14 発行元

第487号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

和久俊三の代表作

法廷ミステリの第一人者・和久俊三の代表作について考える。作品の数が多すぎて私も全体の三分の二しか読んでいない。全部を読むのはもう無理なのではないかと思うこの頃である。さて、どの作品を選ぼうか…。

「仮面法廷」が断トツ

各作品を点数化して順位をつけ、評価すると江戸川乱歩賞受賞作の『仮面法廷』が断トツのトップで他の作品は横並びになる。代表作の一位は当然のごとく『仮面法廷』。

次が難しい。『赤かぶ検事シリーズ』の第一作『疑わしきは罰せよ』は読んではいるが本が私の手元にない。しかたなしに『赤かぶ検事転勤す』を選んだ。シリーズ初期の作品はどれを読んでも面白い。レベル

に差はないと考えてよい。

シリーズ外の作品の中からは『雨月荘殺人事件』を選んだ。特殊な形式の作品なので、それだけでも価値が高い。これ以外のシリーズ外の作品は膨大な数あるが、犯罪に巻き込まれていくパターンの作品は概して私の好みには合わない。

『赤かぶ検事』以外のシリーズからは『夢の浮橋殺人事件』を選んだ。和久俊三得意の京都関連の作品の代表と考えてもらってよい。若い読者も是非手に取ってほしい…。

NO.1 「仮面法廷」 『ミステリ読書案内』第198号で紹介済み。

NO.2 「赤かぶ検事転勤す」

1983年角川文庫。初期の『赤かぶ検事シリーズ』

は直接文庫の形で出ていた。その後各社のノベルズ版に広がっていく。本書はシリーズ10巻目に当たり、それまでの岐阜地検高山支部の支部長から下関支部へ転勤する移動の場面でスタートする。シリーズはこの後長野松本、京都と転勤していくのだが、それはその後の本で読んでもらえれば。本書の冒頭には「転任のあいさつ」が載っている。「やっとかめだなも」で始まる独特の言い回しを楽しむことができる。

赤かぶ検事はかみさんと一緒に山陽新幹線に。新下関で降りようとしたところ、網棚の上に先に降りた客のものらしい荷物が。おせっかいのかみさんが顔を覚えているというので、その鞆を持ってホームで探すのだが…。結局相手を見つけられずに駅構内の警察官派出所に。「網棚の上に置き忘れてあったもので…こうして持って降りたんだわね」「捨ったんではなくて、かっぱらってきたんじゃないのかい？」鞆を開けると中から札束が…。「おいッ…この婆め、すんなり泥を吐け！」「そこのおやじ。黙っとらんで、なんとか言え！」とうとう盗人と疑われることに…。下関も最初から災難が降りかかってくる。相手は一三警部補。

No.3 「雨月荘殺人事件」

1988年中央公論社。『公判調書ファイル・ミステリー』

という副題がついている。私の手元にあるのは1996年に中公文庫に収められたもので、二分冊箱入り「袋綴じ」二箇所というかなり特殊な形態をしている。文庫本で1700円という価格も当然かなという印象。推理作家協会賞受賞作品。『捜査ファイル・ミステリー』と銘打たれたデニス・ホイートリーの『マイアミ沖殺人事件』が本書作成のきっかけになっている。市民セミナーの講座で、裁判記録を元に議論をたたかわせるという内容。「公判調書」の冊子が議論土台になっている。セミナーの状況はシナリオ形式で描写されている。

事件は長野県の温泉旅館・雨月荘で起こった。被害者は金融会社を営み、雨月荘の持ち主でもある月ヶ瀬都子。首吊り状態の自殺に見えるのだが、警察は偽装であると判断し、夫・紀夫を逮捕する。一度自白するのだが裁判の場面では無罪を主張。二分冊のうち、本論に当たる「市民セミナー編」よりも資料に当たる「公判調書」の方が断然厚い。印鑑などは赤色の二色刷りの手の込んだもの。裁判所の罫線入りの書式まで丁寧に再現してある。読者も、袋綴じを開く前に自分なりの推理を組み立ててみるのがよいのではないだろうか。

NO.4 「夢の浮橋殺人事件」

1998年集英社文庫書下ろし。『あんみつ検事の捜査ファイル』シリーズの第一作になる。京都地方検察庁宇治支部長・風祭やよいが主人公。本書では源氏物語の『宇治十帖』に関わる古跡「夢の浮橋」が舞台になっている。

ある早朝、宇治橋の河原で事件が発生。首を斬られた男性の死体とその傍に出刃包丁を持って立つ女性。三角関係絡みの出来事のように見受けられるのだが、被告人は殺人ではなく、死体損壊だけと主張する。疑問を持ったやよいが調べてみると三年前、五年前にも首切断事件があったことがわかってくる。そして、三角関係にあった残りの二人も死体となっていることが判明して、事件はますます複雑になっていく…。